# ヴァンダービルト・アグラリアンと南北戦争

冨所隆治

一、まえがき
二、ナッシュヴィル宣言の背景
三、ヴァンダービルト・アグラリアン
四、抑えがたき戦争
五、利己的破壊的セクショナリズム
六、オールド・サウスの讃美
七、むすびに代えて＝コモン・マンにかけた魔法

## 一　まえがき

C・イートンはジョン・C・カルフーンの政治志向について、〝カルフーンは南部内部の少数グループの利益を全南部人の利益と信じ、工業的利益への奉仕に反対して農業的利益の拡大を擁護したが、それは一九三〇年に南部の工業化に反対して、ドン・キホーテ式の闘いをやった十二人の南部人のアグラリアン[1]のやり方につながっている[2]〟と両者に共通する立場を評言したが、アンテ・ベラムと二十世紀との間には南北戦争という大きな断絶と時間的経過があるにもかかわらず、その間に相通ずる発想が存在している。それは農業的利益という点に南部社会のコンセンサスを





よびさまし、少数者グループの利益の正当性を貫徹させ、北部と対決している姿勢である。

アグラリアンの立場は南部史に脈打つきわだった特徴の一側面[3]を示すと同時に、彼らの南北戦争史観にもきわめて特徴ある形をもって反映されている。この小論ではナッシュヴィル宣言の背景とアグラリアンの主張、この宣言に加ったF・L・オウズリーの観点、その後のオウズリーが指導したグループ研究によるオールド・サウスの再構成、ならびにそれと不可分にかかわりあっている南北戦争史観を再検討し、オールド・サウスと南北戦争史研究上の基礎的道標を確認してみたいと思う。

註(1)　一九三〇年に刊行された *"I'll Take My Stand"* by Twelve Southerners はナッシュヴィル宣言といわれる。そのメンバーと分担テーマは次の通り。
John Crowe Ranson, Introduction: A Statment of Principles & Reconstructed But Unregenerate; Donald Davidson, A Mirror For Artists; Allen Tate, Remarks on The Southern Religion; Robert Penn Warren, The Briar Patch; Andrew Nelson Lytle, The Hind Tit; Stark Young, Not in Memoriam, But in Defense; John Gould Fletcher, Education, Past and Present; John Donald Wade, The Life and Death of Cousin Lucius; Frank L. Owsley, The Irrepressible Conflict; Lyle H. Lanier, A Critique of The Philosophy of Progress; Herman Clarence Nixon, Whither Southern Economy?; Henry Blue Kline, William Remington: A Study in Individualism.

(2)　Eaton, *A History of The Old South*. p. 338.

(3)　Monroe L. Billington, *The South: A Central Theme?* (1969)

## 二　ナッシュヴィル宣言の背景

周知の如く、十九世紀末より南部の経済的ナショナリゼーションは急速度に進行し、南部の工業化をめざすニュー・サウスの構想が実現していった。しかし、そのプロセスは工業や鉄道に高い利潤を保証する廉価で従順な労働力や豊富な資源に着目した北部の独占資本による南部の征服であった[1]。モルガン、メロン、そしてロックフェラーは南部

の鉄道、鉱山、製鉄、石油、金融体系、そしてついには流通部門さえ掌中に収めて会社の代理人を派遣し、支配網を完成させたのである。こうして南部経済は北部資本の植民地と化し、その状態は一九三二年まで持続するにいたった。[2]

一九〇〇―三〇年の間の南部の都市人口は総人口の一八%から三四%に著るしく増大したが、南部における工業化の速度は国家の急激な発展と軌を一にしていた。しかし、一九三〇年に製造工業によって加えられた南部の一人当りの収入は全国平均の三七%、非南部の三〇%にすぎなかった。さらに重要なことにはその一人当りの収入は非南部の四三%にとどまったことである。相対的な低収入の持続した結果、一九〇〇年から三〇年の間に南部十州[3]は三五〇万近い人口を他の地域へ流出させることになった。[4]

南部の工業化を促進し、低賃金を持続させた大きな要因は南部農業の苦境であった。第一次世界大戦後、アメリカ農民は、需要の世界的規模での減退と過剰生産、これに伴う価格の下落などの要因によって深刻な経営上の危機に直面した。一九二〇年代、農業は工業の繁栄にひきかえ、次第にその地位を低下し、慢性的不況に苦しんだのである。[5]工業の発展にもかかわらず依然として農業地域としてとどまった南部において、農業の苦境はもっともきびしい様相を示した。一九二〇年は南部における農業時代の終りを画していた。[6]

一九三〇年に合衆国の農業人口は四四%であったが、南部は人口の六七・七%が農村地域に居住し、労働者の四三%が農業に従事し、合衆国の農場人口の五〇%を擁した。それにもかかわらず、南部の農民は農場当りでも、また投資額当りでも全国最低の収入にとどまった。しかも南部の非農業従事者一人当り年収四八四ドルであったのに対して、農業従事者は一八九ドルにすぎなかった。彼らは棉花および甘蔗の全国生産額の九六%、タバコの八七%そして米の八四%を生産したが、全国総作物価格の三七%を受け取っただけであった。[7]

もちろん、南部のすべての農業地域が同一の不況に直面したわけではなく、また一様に衰退の途を辿ったのでもない。好況期と不況期との交替もみられた。海岸平野の野菜や果物を中心とした北部市場向けのトラック・ファーミン





グは着実に繁栄をとげた。アッパー・サウスのタバコ地域はアメリカ・タバコ会社の独占的支配に反撥して作付面積の制限により価格の維持をはかり、大戦後には協同出荷組合により市場の支配権を掌握し、同時に牧畜業や家畜飼育業などを採り入れた多角経営によって北部市場への接近をはかり、利益をひきだすことに成功した。[8]

ところが、南部の農業人口と農業地域の殆んどは棉作に投入されていた。しかも棉作地域の苦境はもっとも深刻で、問題の解決はもっとも困難なものであった。東部ノースカロライナから中央テキサスに至る棉花王国は、世界の棉花供給の約六〇%を生産したが、それは海外で売却された南部の産物の約半分を占めた。棉花の価格は世界市場において決定されたが、競争条件の悪化は単一作物制度の欠陥を倍加した。

二〇世紀初頭、小作人の数は減少し、クロップ・リーエン制度はその負担を軽減したかにみえたが、一〇年代に入りボール・ウィーヴィルの虫害で荒廃し、大戦後はポンド四〇セントから二一年には一〇セント以下へと大暴落し、二〇年代の一般的物価騰貴の中で、棉作経営は破局に直面した。[9]

一九一〇年から三〇年の時期に一〇の棉作州において小作人によって耕作された農場は五五・一%から六一・八%に増加した。とりわけ、白人小作人の増加は顕著であった。小農は借地人へ、さらにシェアクロッパーや賃金労働者に転落した。この二〇年間に七つの棉作州における抵当額はほゞ四倍に達し、抵当流れは銀行や保険会社の掌中に帰するところとなった。

しかも地主、小作人ともにクレジット・システムに依存していたために、金融上の隷属性は強化され、経営上の桎梏に苦しんだ。土地、建物、家畜および機械によって保証されたプランターの長期借入額は棉作州におけるプランテーションの評価額のほゞ五〇%に及んだ。地主の殆んどが、作物を抵当に入れて銀行からの短期借入を行なった。事実上、すべての小作人は商人からの前借によって生計を維持した。一九三〇年に小作人の月当り家族平均一二、八〇ドルの前借が約七ヶ月に及んだ。そしてシェアクロッパーの年収入の一〇%以上が利息の支払にあてられた。[10]

収入についての事例研究をみてみよう。七つの州に散在していた六四五の典型的プランテーションにおける一九三四年の平均総現金収入は五千ドルを僅かに越えたが、自家消費の生産物の価格を含めた純収入は二千五百ドルにとどまった。同一プランテーションで借地人は家族平均三五四ドル、シェアクロッパーは三一二ドル、賃金労働者は一八〇ドルの年収をみただけである。(11)

しかし、農民はこうした窮状にもかかわらず、打開の途を制度的改革運動にもとめるよりも、むしろ農場から農場へ、あるいは農場から工場へ、そして再び農場へといった空間的移動のなかにもとめた。(12) 南北戦争以来農場組織の墓場といわれる南部は一九二〇年代にファーマーズ・ユニオンを葬り、地域全体にわたる効果的な農場組織を欠くに至った。ファーマーズ・ユニオンは、倉庫運動、協同の構想、公教育および農村クレジットへの寄与をなしたが、協同の失敗、ユニオンの作付面積の減少と作物経営の不振、さらに大戦後のインフレーションによって急速に衰退し、新しい協同運動にリーダーのエネルギーを吸収されてしまった。(13) しかも小作制度による教育水準の低下と、土地の涸渇は、(14) 製造工業品の世界市場制覇に施政の主眼をおいたハーディング、クーリッヂの共和党政権の農民的利益の無視＝典型的にはマクネリ・ホーゲン法案の再度の拒否に示された＝と相俟って、農業改革への途をいよいよ困難なものとしていた。(15)

こうした北部資本による南部の工業化の推進とともに現出した南部の植民地状態と農業の窮状に伴う北部への隷属性・南部経済の苦境こそ、〝もしも一社会、一セクション、一人種、一世代が工業主義の下にあえいでいるなら、そしてそれが悪の分子であることをよく知っているなら、それを取り去る方法をみつけなければならない。……それをしないのは臆病である〟(16)と工業主義への敵意をむきだしにして、全南部の反抗をよびかけた十二人の南部人をたち上らせたのである。





註(1) Hesseltine and Smiley, *The South in American History*. pp. 399—410.

(2) *Ibid.*, pp. 462—78. C. V. Woodward, *Origins of The New South*, 1878—1913. Chap. xi.

(3) 十州とは Kentucky, Tennessee, Alabama, Mississippi, Louisiana, Virginia, North Carolina, South Carolina, Georgia, Arkansas をさす。

(4) W. H. Nicholls, *Southern Tradition & Regional Progress*. (1960) pp. 27—28.

(5) H. U. Faulkner, *American Economic History*. *chap.* 28. pp. 625—30.

(6) T. D. Clark & A. D. Kirwan, *The South Since Appomattox*, p. 269.

(7) Hesseltine and Smiley, *op. cit.*, p. 478.

(8) *Ibid.*, pp. 478—80.

(9) *Ibid.*, pp. 480—80. G. B. Tindall, *The Emergence of the New South* (1967). *Chap. IV.*

(10) Hesseltine and Smiley, *op. cit.*, p. 481.

(11) *Ibid.*, 481.

(12) *Ibid.*, 482.

(13) Tindall. *op. cit.*, pp. 130—31.

(14) Hesseltine and Smiley, *op. cit.*, pp. 482—83.

(15) Tindall, *op. cit.*, pp. 137—41.
尙マクネリ＝ホーゲン法案については、A・M・シュレジンガー著、救仁郷 繁訳「ローズベルトの時代Ⅰ・旧体制の危機」八〇—八五頁参照。

(16) Twelve Southerners, *op. cit.*, p. xx.

## 三 ヴァンダービルト・アグラリアン

如上の現実に苦悩した南部人の間に強烈な歴史意識がよびおこされた。一九二〇年代から三〇年代の時期は〝南部ルネサンス〟の時期として把握されているが、それは単に文学や文芸批評の分野に限定されるものではなく、第一次世界大戦後の南部の古い伝統的秩序の急速な崩壊と現代的秩序の誕生という過渡期の歴史的現実に対する南部人の自覚を示す広汎な知的覚醒を物語るものである。(1)

大恐慌期に南部の地域生活についての新しい二つの異質な見解があらわれた。一つは、ヴァンダービルトを中心とするアグラリアニズムで、他の一つはチャペル・ヒルを中心としたリジョナリズムであった。それらは共に学問的研

究を伴って[2]いた。

前者は一九三〇年の十二人の南部人による『かく主張する—南部とアグラリアンの伝統』の刊行によって大衆の注目をあつめた。これは、一、工業化を意味する進歩についての近代的考えに反対して、二、実証哲学を意味する近代科学の自負に反対して、二連発の銃火をあびた農村的美的についての巧みな讃美であり、宣言の源は、南部の伝統的な在り方に手きびしい批判を加えたメンケン主義と南部の工業化を旗印としたアトランタ精神に反対し、残忍な変化の中に生き続ける南部の伝統の追求にあった[3]。

他方、後者はH・W・オーダムやR・B・ヴァンスを旗手としてあらわれた。それは秩序ある工業発展と農業改革を期待し、そのための調査研究と計画が南部の物質的文化的ルネサンスの鍵をなすものと考え、排他的セクショナリズムを払拭し、地域の統合を促進して国家にくみこみ、全国家的な利益という大きな観点の中で多様化を考慮せんとするものであった[4]。

ここでは、アグラリアンの主張を前掲書によってみよう。編者ランソンによれば、この書の狙いは、産業革命の前進によって脅かされている南部のアグラリアニズムの伝統を擁護することにあった。わけても、南部自体のなかにアメリカの工業的理想の戦列に加担しようとするきざしのみえることへの反撥が彼らをして、たち上らせたのである。

工業主義の弊害は徹底的に糾弾された。工業の支配体制下で過剰生産、失業、富の分配での不平等の拡大に直面した。労働はきびしく、そのテンポは猛烈で、雇傭は不安定であり、さらに労働節約手段の導入によって労働は利潤追求にのみ注がれることになった。労働は隷属的ないし過酷なものであってもうけいれられ、人間生活の幸福な機能としての労働行為の高貴さは看過された。消費についてみれば、飽満と無目的性を強制されている。生産を消費に適合させ、価格を規制し、景気変動から企業を守ろうとする統制委員会はいわばソヴィエト主義者の方式というべきである。このような社会では、宗教が隆盛をきわめることは期待できず、芸術も本来の生命を失い、人間と自然との関係





は破壊される。また人間と人間との間のよきマナー、応待、家族生活やロマンティックな愛の如き生活の楽しさはそこなわれる[5]。

ここにみられる如く、自然と人間の調和、人間労働の自然性、自給自足の健康な生活の讃美、合理性や実用性（利潤追求）に対する批判としての伝統的な、総じて重農主義的理想と価値観がこの宣言の基調をなしている。

ランソンは、現代生活の流転と不安定性に反対して、オールド・サウスの安定性とイスタブリッシメントの存在を讃え、このイスタブリッシメントを再獲得するために南部人は南部のセクショナルな感情を昂めて、脅かされている古い生活様式のすべての擁護に全力をつくすべきであるとし、アグラリアンの保守的で反工業のプログラムをもって民主党を激励するようによびかけた[6]。

学校教育についてフレッチャーは、その実現の不可能を認識しつつも、古典的カリキュラムをもつアカデミーの再樹立による知的エリートの養成を提案し、工業主義が要請する大衆教育を非難した[7]。

現存の経済制度に反対し、ヨーマン経済をもとめたH・C・ニクソンは、農業のデンマークに安定と幸福をみい出し、工業のイングランドに不況と失業をみい出した[8]。

農業における進歩の教理の出現に反撥し、〃農場は富をつくる場所ではなくて、穀物をつくる場所である〃と農業機械の導入に反対したのはリトルであった。彼はランソンとともに商業的農業に向っていく傾向に反対して、自営農民を礼讃した[9]。

この宣言は、かつてない広汎な議論をよびおこしたが、一九三〇年十一月三〇日にリッチモンドでランソンとヴァージニア・クォータリーの編集者S・バーとの間で三千人以上の聴衆を前にして行なわれた公開論争を皮切りに、ニューオールリンズ、チャタスーガやアトランタ等で討論会がもたれた。それらを通じて、ランソンは農場をすて去り、工場に赴くとき、人間の尊厳さは保たれないことを訴えた。彼とデビッドソンは、いかなる条件の下でも工業を強力

に否定し、規制という形での妥協を許容できなかった。[10]

アグラリアンは、マス・コミュニケーションによって大衆運動を目論んだが失敗し、わずかにアメリカン・リヴュウとサザン・リヴュウの二誌に発表の場を得ただけであった。[11]

一九三六年にH・エガーとA・テートにより編集された『アメリカに寄与しているのは誰か』に寄稿したアグラリアンは、大きな財産に、より明確な攻撃を加えた。この中でデビッドソンは、小さな財産をとりもどさせ、農業主義を助長し、行き過ぎた工業主義を抑制するものは、たとえどのようなものであっても、植民地状態の終結に寄与するものであると、のべた。[12] ランソンとリトルは、ヨーマン・ファーマーを讃え、[13] G・M・オドンネルは貨幣経済の大きな利潤追求のためにアグラリアン経済をかえりみないプランターを攻撃した。[14]

アグラリアンの意義は、現代工業主義の俗悪さと破壊性、進歩の無目的性、南部の伝統についての活発な議論をよびおこしたことにあった、[15] といえよう。さらに重要なことには、彼らの伝統の追求は地域的同一性についての関心をよびおこした。それに刺激されて、一九三四年に経済的政治的そして文化的な全南部の実況に関する『南部における文化』の刊行がなされた。しかし、寄稿者の示した南部の生活の複雑性は監修者W・T・クーチのべる如く、農業対工業の対立という簡単な図式に南部の生活を還元することのできない反証を示すものであった。[16]

富のために、快楽のために、威信のために、農業が指導的職業である社会が彼らの描いたユートピアであった。伝統的な美点へのあこがれは、農業文化の礼讃とヨーマンを美化する神話をつくりあげた。[17]

早くも宣言の翌年、ヘッセルタインは、農業文化とヨーマンの美化を根底から批判し、現時点ばかりでなく、南部のセクションの歴史全体を通じても、名声を博した詩人や宗教上の秀れた遺産の見当らないこと、学者、思想家、多くの軍人や政治家にも傑出せる人物の存在しないこと、さらに大学も北部にくらべて劣っていること、学校制度も後進的であることを列挙して反論した。[18] メンケンはアグラリアンの無批判な正統主義を真向から攻撃したが、[19] V・J・





ロックの指摘にみられるように、アグラリアンの致命的弱点は、保守的逆行的ユートピアの構想にとどまり、現実と正面から取組んでいない高踏的批評に終始している点にある。[20] ヘッセルタインは、アグラリアンの誤りが南部の工業化の不可避を認識しながらも開発を拒んでいることにあると主張し、工業主義の現況への前向きの意識的な取り組によって南部の明確な特徴を保持するように訴え、懐疑や反動の精神によっては何ら益することがない旨をのべた。[21]

実際、彼らは何ら改革の具体的提案を行っていないばかりでなく、南部農業のなかで真に忘れられた莫大な数のニグロと白人シェアクロッパーに全く留意していないのである。[22] 小農を援助する今日のプログラムに何ら実際的効果を及ぼさなかったばかりでなく、デビッドソンの如きは、小作人を自作農にする努力を放棄したのである。[23] ティンダルののべるように、アグラリアンの運動の主要な皮肉は現実から遊離していることであった。このため、[24] 彼らは嘲笑的批判をうけ、工業主義と商業文化が南部においてより強固な地歩を築くにつれ、彼らのプログラムは信頼を失っていった。[25]

註(1) C. V. Woodward, *The Historical Dimension*. pp. 182—90. *in The Craft of American History. Vol. II* ed. by A. S. Eisenstadt. (1966).

(2) Tindall, *op. cit.*, p. 579.

(3) *Ibid.*, pp. 576—77.

(4) *Ibid.*, pp. 583—88. ヴァンスの作品として、Human Factors in Cotton Culture (1929), *Human Geography of the South* (1932) を、オーダムの作品として、*An American Epock: Southern Portraiture in the National Picture* (1930). *Southern Regions of the United States* (1936) をあげることができる。

(5) Twelve Southerners, *op. cit., Introduction.*

(6) *Ibid.*, pp. 1—27.

(7) *Ibid.*, pp. 92—121.

(8) *Ibid.*, pp. 176—200.

(9) *Ibid.*, pp. 221—45.

(10) Tindall, *op. cit.*, p. 581.

(11) 前者の発行期間一九三三—三七年、後者は一九三五—四二年で、ニューヨークとルイジアナ大学から各々刊行された季刊誌。

(12) Agar and Tate (eds.), *Who Owns America? A. New Declaration of Independence* (1936). pp. 133—

34. in Tindall, *op. cit.*, p. 581.
(13) Tindall, *op. cit.*, p. 581.
(14) *Ibid.*, p. 581.
(15) *Ibid.*, p. 582. Woodward, *The Historical Dimension*, p. 183.
(16) Tindall, *op. cit.*, pp. 582—83.
(17) W. B. Hesseltine, "*Look Away Dixie*," *Sewanee Review*, XXXIX (1931), pp. 97—101.
(18) *Ibid.*, pp. 101—02.
(19) H. L. Mencken, "*The South Astr*," *Virginia Quarterly Review*, XI (1935) p. 53. in Tindall, *op. cit.*, p. 579.
(20) Cf. Viriginia J. Rock, "*The Making and Meaning of Ill Take My Stand: A Study in Utopian-Conservatism*, 1925—1939" (Ph. D dissertation, *Univ. of Minnesota*, 1961).
(21) Hesseltine, *op. cit.*, pp. 102—3.
(22) Nicholls, *op. cit.*, p. 30. Tindall, *oq. cit.*, p. 581.
(23) *Ibid.*, p. 581.
(24) *Ibid.*, p. 581.
(25) Cf. Rock. *op. cit.*, *Part II. The Book and Its Effects.*
たとえば、ファーマーズ・ユニオンのC・S・バレット会長は、農民はもはや農場生活の崇高さを語らない、と書いた。Tindall, *op. cit*, p. 125.

## 四　抑えがたき戦争

ナッシュヴィル宣言に加わったF・L・オウズリーは、分担執筆の狙いを次のようにのべている。南部は戦争によって征服され、平和になって屈辱をうけ、困窮してのち精神的征服をうけ、北部の伝説で教育され、戦争犯罪、奴隷犯罪、叛乱の汚名をきせられ、その結果南部人の生活様式や生活信条への信頼をゆさぶられ、〃リンカンがユニオンを救ったと教育されたために、まさしく南部においても英雄視されている。[1]〃

〃この現実にかんがみて、南部が正しい認識に復帰するよう北部伝説の不当性に注意を喚起するものである。[2]〃と。

この章で、オウズリーは南北戦争において頂点に達した工業主義とアグラリアニズムの闘争の物語を詳説し、リンカンの英雄伝説に真向から挑戦した。全闘争を光りと闇、真実と偽り、奴隷と自由人、自由と専制との闘いとして把握する北部的見解、わけても奴隷制度に注目したJ・F・ローズやJ・B・マックマスターの見解を一擲した。[3]





彼は戦争原因について複数説を認めながらも、すべては二つのセクション間の基本的相違から生じたとし、それを北部の工業的商業的文明と南部の農業的文明という対句で表現した。[4]

オウズリーによれば、南部は農業社会の理想に情熱をささげたが、元来南部の土地と天候は農業経済の豊かさを増すのに適し、しかも入植者の殆んどはヨーマンであったのである。新世界の環境と旧世界の伝統が結びついて、南部は農業文明の中心となったが、それはいずれの文明にも劣らない力と将来を約束されていたのである。[5]

戦争は奴隷制度を争点として到来したのではない。リンカンやシュウォードや共和党急進派は奴隷制度と自由の間の闘争と刻印することによって闘いに道義性の衣を着せた。それは選挙に勝つための偽瞞であった。戦争は、合衆国憲法制定期にみられたセクション間の勢力の均衡が、合衆国の拡大と成長に伴って維持できなくなり、社会の特殊な制度をもつ一セクションを収奪するか、さもなくば、その積極的利益のために政府の機能を行使できなくなったところに生じた。[6]

工業セクションは、㈠　南部の市場を独占するための高関税を要求——これは南部を犠牲にし、北部が利益をひきだすための原則であった。㈡　海運業や商船への国家の補助を要求——これは南部搾取に附加される。㈢　鉄道・運河・道路など国内交通の連邦の費用による改善を要求——これは工業製品の南部および西部への輸送を国費でするもの。㈣　連邦政府の統制する銀行に賛成——これは北部だけの要求であった。等を掲げた。これらは南北間の利益の衝突を説明する。[7]

セクション間の争いに油を注いだのが奴隷制度の問題であった。綿繰機の発明と南西部における棉作地の拡大は、ニグロ奴隷を大きな利益をもたらす経済的手段とした。プランターは数年のうちに巨額の富をつくった。棉花王国の

成立は農業セクションにダイナミックな力を与え、常に新しい耕地を渇望せしめた。これに対して北部は、もしも南部の奴隷制が西部の土地に拡大されるなら勢力の均衡を失い、利益の損われるのを恐れて、反対の挙に出た。ギャリソンや反奴隷制協会、さらに牧師たちも奴隷所有者を告発し、非難の限りをつくした。これに応えて、南部は聖書による奴隷制度の正当化にとどまらず、ハモンド、フイッツフュー、カルフーン、ハーパーおよびデューらはフィリップスが南部史の中心テーマと呼んだ人種問題という立場から奴隷制度を正当化し、また経済的必要から擁護した。准州への奴隷制度の拡大をめぐって、アボリショニストの攻撃とこれに対する南部の憤激がみられた。[8]

その上、両セクションは奴隷制度がなかったとしても、それ自身の制度や連邦政府に対する要求を弁明し、正当化する各々の政治思想を発展させていた。州権論は奴隷制度を擁護するための防御機構ではなく、工業的商業的北部の搾取と侵略に対する農業社会のとりでであり、南部内部における地域的利益を擁護するものであった。州と連邦との間の権力の厳格な分割論の立場にたつ南部は、保護関税、船舶補助金、国立銀行および連邦支出金による国内交通改善の如き立法を促す憲法解釈に反対した。北部とは対照的に、南部の農業社会は他の地域の犠牲を求める何らの積極的プログラムを要求しなかった。相反する経済的社会的制度から生まれた二つの政治思想を和解させることはできなかった。こうした状況から定着した生活信条は相食むものであった。北部の急激な成長によって南北の均衡がくずれ、リンカンが選出されるや、北部との協力関係を断ったのである。[9] と。

オウズリーは、南部が北部に政治的、経済的さらに精神的に隷属し、北部の独善的、偽善的判断に追従している不当性[10]を南北戦争にさかのぼって糾弾し、奴隷制経済の窮迫、アリストクラシーの支配を否定して、南部社会の内部的戦争原因を払拭することにより、南部の道義的正当性を訴えたのである。

ところが北部が生んだ神話[11]に代って、理想化されたアンテ・ベラム文明の神話がつくられた。南北戦争と再建をめぐる衝突と幻滅、二十世紀南部の現実に対する失望は、南部をユニオンに調和させるどころか、かえって勝者北部に





対する鋭い反動をみちびいたのである。[12] オウズリーの南北戦争史観には、失なわれた大義がいよいよかたくなに把持されているのである。事実、ビリントンの指摘するように、オウズリーは南部とアグラリアニズムとを同一視し、内的多様性を欠落せしめている。[13] 就中、南部内部の緊張関係、奴隷制度のもつ意味は全く視角からはずされているのである。

註(1) Twelve Southerners, *op. cit.*, p. 66.
(2) *Ibid.*, pp. 67—68.
(3) *Ibid.*, p. 68.
(4) *Ibid.*, p. 69.
(5) *Ibid.*, p. 69—71.
(6) *Ibid.*, pp. 72—73.
(7) *Ibid.*, pp. 74—75.
(8) *Ibid.*, pp. 76—84.
(9) *Ibid.*, pp. 84—92.
(10) *Ibid.*, p. 67.
(11) プランターの支配するアリストクラティックな南部といった理解。
(12) Billington, *op. cit.*, pp. 1—2.
(13) *Ibid.*, p. 6.

## 五　利己的破壊的セクショナリズム

『抑えがたき戦争』にみられたオウズリーの志向は、一九四〇年代の一連のグループ研究の方向を予示していた。オウズリー夫妻の『レート・アンテベラム南部における社会の経済的基礎』[1]を皮切りにヴァンダービルト・グループの統計的研究が次々と発表された。[2] しかし、それらは大学院においてオウズリーがうちだした一つの南北戦争史観を背景にしていたのであり、原因論の構築をなすものであった。

『抑えがたき戦争』の出版から十年余りの歳月を経た一九四一年にオウズリーは、『南北戦争の基本的要因』を発表し、南北戦争史観を一層明確に示した。この中で彼は、〝戦争が人民の人民による人民のための政治が地上から消滅しないように闘われたという演説の本質的見当ちがい〟[3]をつき、〝南北戦争は、自由政府や個人の自由を破壊せん

とする南部の側の闘いではなかったし、それらを擁護しようとする北部の側の闘いでもなかった[4]〃と主張した。彼は、実際一八六一年における北部と南部の人々はいずれも自由政府の諸原理に深く愛着をもっており、彼らのイデオロギーはひとしく民主的なものであった[5]、と南部の道義的正当性をイデオロギーの次元にまで徹底せしめた。こうして、南北戦争を両文明間の衝突として理解するのではなく、心理的状況に唯一の戦争原因をもとめた。彼は別個の政府を樹立し、独立を達成しようとする南部と、それを阻止し、ユニオンを擁護するために武力に訴えた北部との背後に戦争心理とよぶことができる両セクションにおける精神状態をみい出した。

〃一八六一年の春までに南部の人々は北部の人々と同じ政府の下で生活を続けていくことをたまらなく嫌い、かつ危険と感じた。南部の人々の大半の間にこの感情がきわめて強かったので彼らは分離を企て、長い荒廃をもちきたした戦争の用意をした。一方、北部は彼らと同じ政府の下に彼らのきらっている同胞市民をひきとめるための闘いをもとめていた[6]。〃

それでは、このような精神状態の原因は何であったか。オウズリーはセクショナリズムに唯一の基本的原因をみた。彼はセクショナリズムに二つのタイプを与え、利己的破壊的セクショナリズムと、善意をひろめ政治的集権化や専制主義にブレーキをかける建設的セクショナリズムとを区別し、一八六一年に連邦を破壊した責を前者に負わせた[7]。

オウズリーは利己的破壊的セクショナリズムを分析し、それが三つの基本的示現――第一は支配的セクションがみずからを国家と考え、その人々をアメリカ人と考え、その利益を国家的利益と考える習慣、第二はニューイングランドと南部とが維持したセクショナルな勢力の均衡をうちこわすことによって連邦政府に対するその政治的支配権を獲得する、ないし維持しようとする一セクションの多年にわたる企て、第三は戦争の鍵というべきもっとも危険な局面となった国際法でいう国際礼譲というべきセクション間の礼譲の無視――をもっていたことを指摘した[8]。

しかし、彼によれば、ミズーリ論争まではセクション間の対立にもかかわらず、礼節や自己抑制が維持されていた。





ところが、論争以後アボリショニストたちの言語に絶する傍若無人な中傷と侮辱によってセクション間の平和は奪われ、南部人の自尊心は傷つき、戦争への危機を招いたのである[9]。と。

オウズリは『抑えがたき戦争』においてなした南部の道義的正当化を一層徹底させて、政治的・経済的・イデオロギー的性質の戦争原因をすべて否定し、感情的契機に抽象した。就中、奴隷制度の道義性をアボリショニストの非道な中傷にすりかえ、セクション間のイデオロギーの同一性、階層間のコンセンサスを主張して、戦争心理という超歴史的次元に唯一の原因をもとめた。しかし、それでは利己的破壊的セクショナリズムはどうして生成したのか。アボリショニストの煽動によって戦争が到来したのか。さらにまたアボリショニストの暴虐さにくらべ、ファイア・イーターは礼節を保っていたのか。これらに合理的な説明を与えることはできない。戦争原因をあげてアボリショニストに転嫁し、南部社会の内的要因を全面的に却下して、強烈に南部の正当性を主張する擁護論に「失なわれた大義」の確固たる信念が依然としてつらぬかれているのをみるのである[10]。それは、市民革命的性格の否定であり、ナショナリズムとリベラリズムによる前近代性の克服として把握する進歩史観に真向から挑戦しているのである。

註(1) E. L. & H. C. Owsley, "The Economic Basis of Society in the Late Ante-Bellum South." The Journal of Southern History. (1940).
(2) 拙稿「ヴァンダービルト・グループに対する一批判」西洋史学 五七号、註(2)参照。
(3) Owsley, "The Fundamental Causes of The Civil War" The Journal of Southern History. (1941). p. 3.
(4) Ibid., p. 3.
(5) Ibid., p. 4.
(6) Ibid., p. 6.
(7) Ibid., p. 7.
(8) Ibid., p. 8.
(9) Ibid., p. 12—15
(10) C・F・コウゼンは〃南部の弁明者〃のうち、もっとも著名できわだっているのがオウズリーであるとのべている。Cauthen, The Coming of The Civil War, in Writing Southern History, ed, by A. S. Link and R. W. Patrick. (1965). p. 235.

## 六　オールド・サウスの讃美

戦争責任をあげて北部のアボリショニストに帰したオウズリーは南部社会の民主的構成をもって彼の説の正当性を確証しようとした。彼は〃一セクションないし一国家の経済構造はその政治構造が依拠する基礎である〃[1]との前提にたって、南部の経済的基礎（ここでは土地）を対象として、一連の研究を指導した。

オウズリーはそれらの結論を次のように要約した。〃南部の状況は普通に考えられていたのとは完全に逆であることを知る。東部の金権政治家は工業と商業とを支配している。一方、南部のいわゆるスレーヴ・オリガーキーはブラック・ベルト以外の土地を殆んど所有していないばかりか、ブラック・ベルトの土地でさえ約二五％を所有しているにすぎない。実際に、全体としてブラック・ベルトばかりでなく全南部において基本的生産手段は人口のすべての階層の間によく配分されていた。一八六〇年に南部の家族の圧倒的多数は彼らの農地と家畜を所有していた。奴隷所有者の約九〇％と非奴隷所有者の約七〇％が土地を所有した。奴隷所有者の大半は小農民で、オリガーキではなく、合計すれば、小農民は大プランターよりも多くの奴隷および土地を所有した。……南部は北西部と同様に民主的イデオロギーを強力にしていたばかりでなく、自由政府への健全な経済的基礎を有していた。[2]〃

南部社会は一般民衆の優越的影響力に基礎をおき、経済的デモクラシーと社会的平等を保証され、しかも高度の繁栄と上昇の機会にめぐまれた中産階級の支配する社会として把握された。[3]

統計的数値からオールド・サウスの民主的社会構成、ミドル・クラスを中心としたコンセンサスを示すことによって、ファーマーの没落とプランターの寡頭支配というフィリップスーグレイーダッドの定説（オールド・サウスの三次元解釈）[4]に挑戦した。しかし、オウズリーの再構成は、二十世紀南部における小作人との対比[5]によって、美化されたばかりでなく、〃当時のもっとも進んだ国々の状況にくらべてみて、南部の白人は全世界におけるもっとも高い教





養をもつ主要グループの一つである〃[6]とさえ讃美された。

オウズリーは『抑えがたき戦争』において描いたオールド・サウスの讃美を、統計的数値を用いることによって実証性をもたせようと試みているが、歪曲された分析手続きのため恣意的抽象的把握に陥ってしまった。ミドル・クラスの過大評価と奴隷制経済の発展法則を無視した環境決定論による理解のために、フイリップスーグレイーダッドの定説への批判は根底からくつがえされなければならなかった。[7]

史上ヨーマンが社会を支配した事例が存在するだろうか。また仮にヨーマンが社会において数的優越を占めたとしても、そのことが即社会の民主的理想的構成と言えるだろうか、こうした前提自体を検討しておく必要があろう。

それでは、どうしてオウズリーの定立がルーズベルト時代に注目されるようになったのであろうか。この点について、J・C・ボナーやE・A・マイルズはニューディールがコモン・マンを強調し、オウズリーの定立を支持する理想的環境を用意したことを指摘している。[8]

註(1)　Owsley, "*Fundamental Causes of The Civil War.*" p. 4.

(2)　*Ibid.*, pp. 5—6.
同様の結論は他のメンバーも示している。H. L. Coles, jr., "*Some Notes on Slaveownership and Landowonrship in Louisiana, Farmers*, 1850—60". J. S. H. (1943). p. 394. Cf., H. Weavrer *Mississippi Farmers*, 1850—1860. オウズリはさらに再確認した。Owsley, *Plain Folk of The Old South*,(1949)pp. 8—16.

(3)　拙稿「前掲論文」参照。

(4)　U. B. Phillips, "The Origin and Growth of the Southern Black Belt" *American Historical Reviewu*, xi (1906) pp. 798—816. L. C. Gray, "Economic Efficiency and Competitive Advantages of Slavery Under the Plantation System." *Agricultural History*, vol, VI (1903), pp. 131—149. W. E. Dodd, *The Cotton Kingdom*,(1919). Chap. II. The Rise of Cotton Magnates, pp. 24—47.
プランテーション経済におけるプランターの非奴隷所有に対する有利な立場からランターは良地、奴隷を独占的に所有して、独占的繁栄を享受したが、非奴隷所有者は次第に経済的上昇の機会を奪われ、両階層の亀裂は拡

大していったとみられた。

(5) コールズ・ジュニアは、南北戦争前の状態とは正反対に、今日ローア・サウスの農民の七〇—八〇%が小作人であることは周知の事実である、とのべている。Coles. jr., op. cit., p. 384. Owsley, "*Economic Basis of the Late Ante-Bellum South.*" p. 31.

(6) デボーの各国の文盲率の対比のみで論ぜられているため説得力がない。Owsley, *Plain Folk of the Old South* pp. 146—47.

(7) F. Linden. "Economic Democracy in the Slave South: An Appraisal of Some Recent View." *The Journal of Negro History*. XXXI (1946). pp. 140—89. 拙稿「前掲論文」参照。

(8) A. S. Link & R. W. Patrick, *Writing Southern History*, p. 131. p. 155.

## 七　むすびに代えて＝コモン・マンにかけた魔法

一九五五年のルイジアナ・ヒストリカル・クォータリーに寄稿したC・イートンは、南部史の記述にみられる一般的傾向を論評して、オールド・サウスのヨーマンリーをほめそやす傾向は、彼らが以前南部のプランターに魔法をかけたのと同じ方法でコモン・マンを感傷的なものにし、ロマンティックにする歴史家や小説家の危険を招来するであろう、[1] と警告した。

ニューディールの小作人プログラムの基礎調査を行ったリジョナリストのR・ヴァンス[2]は、一九五〇年に早くも二つの観点から、きわめて説得力のあるオウズリー批判を提起していた。[3] ヴァンスは、オウズリーの地方的統計的分析が漠然として焦点を結んでいないこと、また現代の統計上の方法の使い方や操作にあまりにも無知であることを指摘し、分析が完結していないため未消化の統計資料がならべられ、単純なリストと平板な分布が掲げられているにすぎない、と分析の欠陥をのべた。第二は理論構成に対する批判であった。ヴァンスは、他のすべての階級の機能を充分に考慮することなくして社会におけるいかなる階級の状態も役割も描くことはできないとの見解を示し、ニグロの重





要性の無視されていること、また非奴隷所有者のかなりの数が抑圧されているというオルムステッドの主張に対する詳細かつ明確な反証のないこと、とりわけアンテ・ベラム社会の権力構造が未解明のままであることを指摘し、ほとんどの社会において富裕かつ教養のある有力者が指導権をにぎっているが、ローア・サウスの政治の場合は異っていたといえるだろうか、と反駁した。[4]

統計上の問題点のいくつかは別稿で指摘したので、[5] ここでは理論構成について若干の問題点をのべてみたい。オウズリーに対する批判の核心はヴァンスにおいてみられる如く、アンテ・ベラムの全政治経済の構造・論理というパースペクティヴのなかで社会構成が問われていないところにある。オウズリーの視点からはアグラリアニズム＝南部という単純な把握が示されているにすぎず、これ以外の要素は無視された。このため南部社会を規定する重要な要素であるニグロの存在、就中奴隷制度は政治的意味においても経済的意味においても、また社会的意味においても考察の対象から除外されている。

また一階級の政治・経済的理解は社会の権力構造をはなれてはありえない。南部内部の権力をめぐる階級間の緊張関係はどのようなものであったろうか。奴隷制度はなぜ州の権利、南部の権利として擁護されたのであろうか。これと関連して、筆者はあえて、アボリショニストの攻撃がプランターにとって是非必要な攻撃であった、という側面の存在したことを指摘したい。非奴隷所有者の間の昂まる階級意識に人種的優越をとって代らせる方策としてアボリショニズムは巧みに利用されたのである。たとえギャリソンがいなかったとしても、彼をつくりあげることは南部のプランターにとって願わしいことであった。[6] ヘッセルタインの主張する如く、〝南部史の真の中心テーマはプランター階級が支配権を維持することにあった。[7]〟 事実、ターナーの指摘にみられるように、南部は地理的多様性を示したばかりでなく、南部人も南部史全体を通じて決して結束することのできない利益の多様性を擁していたのである。[8] それ故にこそ例えば、分離運動においてリーダーは大きな批判勢力に直面し、分離をめぐる見解の分裂を克服するために

幾多の手を策し、内部結束に苦慮し、強行手段に訴えたのである。[9]

誤まった数的処理と理論構成によって、コモン・マンの実体は消失し、美しい幻想と化してしまった。コモン・マンは魔法にかけられたのである。

二十世紀のアグラリアンには南部もアメリカであるという一体性の認識が欠落していて、工業的北部への対決という偏狭なセクショナリズムにとらわれているのを知ることができる。強烈な南部の反動をみちびいた歪められた再建と植民地的状況下での工業化の進行、農業利益の後退と苦境の中に「失なわれた大義」が抱きつづけられたのである。[10] それ故、全国的パースペクティヴの中で南部の地域開発と発展の方向を探究したリジョナリストこそ南部の地域研究にふさわしい条件を備えていたというべきである。

註(1) Eaton, "Recent Trends in the Writing of Southern History," *L. H. Q.* XXXVIII (1955). p. 35.

(2) 彼は一九二九年に早くもリジョナル・スクールの最初の重要な労作 *Human Factors in Cotton Culture* を、三年後には南部の現況を網羅せる *Human Geography of the South* を著わし、リジョナリストのテーマを示した。

(3) Review of Owsleys Plain Folk of the Old South, by Rupert Vance, *in the Journal of Southern History*, XVI (1950).

(4) *Ibid.*, pp. 545—47.

(5) 拙稿「前掲論文」

(6) Hesseltine, "Some New Aspets of the Proslavery Argument" *in the Journal of Negro History, vol.* XXI (1936). p. 2.

(7) *Ibid.*, p. 14.

(8) Billington, *op. cit.*, p. 2.

(9) 拙稿「ローア・サウスの分離運動に関する一考察——陰謀説の再評価を中心として」史苑三〇—二参照。

(10) とくにオーダムの研究は、地方や州の計画の若干のプログラムやT・V・Aの構想を促した。一九三九年一二月の南部知事会議は彼の企画にもとづく十年プログラムを公表した。また彼は一九四一年アラバマ大学のパルマーによって設立された The Southern Association for Science and Industry の研究と発表を鼓舞した。彼が協同研究をまとめた *Southern Regions of the United States* (1936) は社会科学者や大学生のバイブルとして一世を風靡した。(Tindal, *op. cit.*, pp. 583—88).

(一九七一年一月二十日)